

周作人と明治大正期の日本児童学：高島平三郎からの受容を手掛かりに

呉，紅華
九州産業大学

<https://hdl.handle.net/2324/1913958>

出版情報：“《春水》手稿与日中文学交流：周作人、冰心、滨一卫” 国际学术研讨会论文集. 1, pp.181-198, 2018-02-06. 九州大学QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」

バージョン：

権利関係：



周作人と明治大正期の日本児童学 ——高島平三郎からの受容を手掛かりに

九州産業大学 呉 紅 華

従来の周作人（1885~1967）児童学関連の研究（1）は、本論で取り上げる高島平三郎（1865~1946）の『児童を謳へる文学』や『児童研究』のことに触れてはいるものの、詳細な分析を施すことは少なかった。また周作人の児童文学そのものに関しても、そのほとんどがアンドルー・ラング（Andrew Lang 1844-1912 イギリスの古典学者、人類学者）の人類学や、柳田国男（1875-1962）の民俗学との関係性を論じるものであった。

しかし、周作人は、1913年に書いた「童話略論」の結論の中で、「教育童話を志すものは、一に、諸民俗学を明らかにしなければ童話は成り立たず、二に児童学を明らかにしなければ教育には適合しない」（2）と述べていることを踏まえれば、児童学からのアプローチが不可欠であるのは明らかである。

本論は、明治大正期に活躍した教育心理学者・高島平三郎を手掛かりに、日本における児童学研究の発達と展開を概観し、その流れの中で、周作人が帰国後に書いた童話や児童研究の材源、日本児童文学関連の紹介と翻訳、その比較研究などを分析する。その中で、児童文学を含む日本児童学研究の周作人による受容及びその特徴を検討・整理し、その意義を明らかにする。さらに、戦後に書かれた『児童雑事詩』に集約される彼の児童論についても検証してみたい。

一、

高島平三郎は、日本の教育心理学研究の創始者であり、児童教育心理学研究の草分けとして多くの業績を残した人物である。明治20年代の教育界において、彼は児童研究運動に参加し、児童研究を「小児観察から小児研究へ」展開させた。1898年11月には専門研究月刊誌『児童研究』を創刊し、東大を中心とした児童研究会を全国的な日本児童学会へと発展させるなど、大きな役割を果たしたことで知られる。彼が取り組んだ学問の分野は幅広く、児童心理学のみならず、「教育史」「体育史」「家庭教育論」「女子教育論」等多岐にわたる。このような多分野に興味を示す雑学タイプの学者という意味では、周作人と気質的にとても近いと言えるだろう。

さて、周作人は、1906年から1911年にかけて日本に留学している。当初は兄・魯迅と生活を共にしていたが、1909年3月18日に羽太信子と結婚し、同年夏に魯迅が帰国したこと

で、夫婦水入らずの新婚生活をスタートさせた。

それ以降の留學生活については、年譜資料が少なく、兄弟二人のこの当時の日記も確認できないため、不明な点が多い。ただし、周作人が当時執筆していた随筆や書籍購入記録などから、ある程度は推測が可能である。すなわち、日本語を学ぶかわら、日本人社会を理解するために、寄席に落語を聞きに行ったり、各種のイベントに出かけたり、妻の家族と釣りに行ったりした他、各種の学術雑誌を熱心に読んでいた形跡がみとめられる。

ところで、本論で取り上げる『児童研究』（1898~1941）は、当時の日本における児童研究の状況や、西洋の児童研究関連文献の翻訳活動、それに関連する研究者間の交流などについての情報がおさめられた貴重な資料である。

この『児童研究』には、高島の「生後一年」「玩具選択ノ注意」（1908）、「童話ニ就テ」（1909）、「人形ノ研究」「玩具ノ研究」（1911）といった連載論文が確認できる。新婚の周作人夫婦が興味を持ったことは想像に難くない。事実、周作人は帰国後、同様の内容についての児童関連文章を数多く執筆している。

1909年、高島はベストセラーとなる『児童心理講話』を出版し、ついで1910年には、子供を主題とした詩歌類や随筆類を集めた『児童を謳へる文学』を刊行している。この『児童を謳へる文学』は、古典籍や各地の詩歌・伝説などから児童に関するものを広く収集・記録した貴重な文献であり、後の日本における童謡童話運動に大きな影響を与えた。

周作人は、この書の価値をいち早く察知したのか、出版後すぐに入手したらしい。以下は1923年2月11日付『晨报』随筆欄に掲載された、『児童を謳へる文学』を紹介する一文である（3）。

高島平三郎編、竹久夢二挿画の『児童を謳へる文学』が1910年に出版され、私の本棚に納まってもう十年以上になる。最近再度手にとって読んでみたが、今なお新鮮なおもしろさを感じることができた。全六編からなり、日本の短歌・俳句・川柳・俗謡・俚諺・随筆の中から児童に関するものを集録していて、編者の意図したとおり、古今の人びとの児童に向けた心情を考察する一方で、一冊の素晴らしい児童詩選集となっている。夢二の十六枚のカラー挿絵は、夢二らしいやわらかなタッチで児童の暮らしを切りとっている。夢二の画集のような艶やかさはないものの、天真爛漫な雰囲気を加えており、これもまたこの書の特色の一つとなっている。（高島平三郎編、竹久夢二画的《歌詠児童の文学》，在一九一〇年出版，插在书架上已经有十年以上了，近日取出翻阅，觉得仍有新鲜的趣味。全书分作六编，从日本的短歌俳句川柳俗谣俚諺随笔中辑录关于儿童的文章，一方面正如编者的本意，足以考见古今人对于儿童的心情，一方面也是一卷极好的儿童诗选集。梦二的十六页着色插画，照例用那梦二式的柔和笔致写儿

童生活的小景，虽没有梦二画集的那种艳冶，却另外加上一种天真，也是书中的特彩之一。)

周作人が夢二の十六枚の挿絵に注目したことは、彼独特の感性によるところが大きいだろう。彼は 1925 年に兪平伯の詩集『憶』に豊子愷が挿絵を描いたことを評価しているが、これも『児童を謳へる文学』の夢二の挿絵を基準としていた。ちなみに、豊子愷は晩年周作人の『児童雑事詩』に挿絵 69 枚を提供し、当時の文壇では大物作家のコラボとして大いに注目された(4)。

では、周作人の文学に高島が与えた影響はどのようなものであっただろうか。周作人はこの『児童を謳へる文学』によって、初めて小林一茶の俳文集『おらが春』の存在を知り、その後、多くの文章の中で一茶について触れることになる。ここでは、例えば「日本の俳句」(1916)、「日本の詩歌」(1921)、「日本の小詩」(1923)、「一茶の詩」「おらが春」(1923)などのように、主に一茶の子供に関する俳句や俳文を紹介している。

周作人は、一茶について以下のようにその詩風を評する。

彼(小林一茶)の特色は、そのいわゆる子供っぽさにある。それは彼の行動にも文章にも表れており、天真爛漫である一方で、強情で図々しく、癩癪を起しがちでもある(他的特色は在于他的所谓小孩子气。这在他的行事和文章上一样明显地表示出来，一方面是天真烂漫的稚气，一方面却又是倔强皮赖，容易闹脾气的。)(5)

一茶は周作人の新詩創作に大きな影響を与えることとなり、また周作人の新詩はその3分の2が子供の詩である(6)。

周作人は、小林一茶だけでなく、『枕草子』についても『児童を謳へる文学』によって知った。彼は以後『枕草子』に強い愛着を示し、晩年には全訳を著したほどであった(7)。

その他にも、周作人が、『児童を謳へる文学』によって様々な日本の児童関連作品に対して興味を持つようになった様子がうかがえる。文泉子こと坂本四方太(1873-1917)の半自伝的小説『夢の如し』(8)は、やはり留学期に三田で購入し、1944年『芸文雑誌』にその翻訳を連載している。また中勘助(1885-1965)の『銀の匙』については、息子の豊一に訳させて、自分が手を入れて出版したと『銀の匙』引言に書いている(9)。1928年には森鷗外の『キタ・セクスアリス』(1909)を翻訳した。これらの日本文学作品は、いずれも児童に関する内容を持ち、周作人の一押しの作品ばかりである。

このように、周作人の児童関連書への関心は、高島の『児童を謳へる文学』との出会いが契機となっていることがわかる。この書と出会って以降、周作人は多くの児童関連書に

注目し、読み漁っていたことは明白であろう。この『児童を謳へる文学』は、日本文壇のみならず、周作人文学、さらには中国文壇にも多くの影響を与えたもので、周作人が児童文学への関心を深めていく中で特に重要な一冊だったとすることができる。もちろん、周作人の児童学には、他にも様々な要素の影響が絡んでいるが、少なくとも、この本との出会いが周作人が日本児童文学に近づく大きなきっかけとなったことは疑いのないところだろう。

二、

1944 年、周作人は自身の学問について総括した回想文「私の雑学・児童文学」(10) の中でこう述べている。

私は東京にいた頃に高島平三郎が編集した『児童を謳へる文学』と彼の著作である『児童研究』を手に入れたことで、その方面に興味を持った。当時児童学は日本でもやっと発展し始めたばかりだった。(我在东京的时候得到高岛平三郎编的《歌咏儿童的文学》及所著的《儿童研究》，才对这方面感到兴趣，其时儿童学在日本也刚发达)

ここにいう『児童研究』とは、具体的にどのような著作だったのだろうか。

実は、この本については、これまであまり注目されることがなく、その実体についても解明されていなかった。というのも、『児童研究』という名の雑誌は知られているが、同名の著作物の存在は知られていないからである。

『周作人日記』(11) には、雑誌『児童研究』を定期購読していたらしい記述が見られる。

〔1913・4・12〕高島の児童研究を入れるための紙箱を作った。喬風（弟の周建人）に題字をたのまなければ。（作紙匣一个以盛高岛著儿童研究当令乔风（弟建人）题字。）

従って、周作人が雑誌『児童研究』を知っており、目を通していてもいたことは疑いない。

一方、高島は、雑誌『児童研究』に毎号児童論を連載していて、1911 年にはそれまでの連載をまとめた著書『教育に應用したる児童研究』(12) を出版している。周作人のいう高島「所著的《儿童研究》」とは、この『教育に應用したる児童研究』の略称だったのではなかろうか。周作人の 1914 年 1 月 29 日付の日記には、“児童研究”を読んで「玩具研究一」を書いた旨の記述がある。「玩具研究一」の内容は、『教育に應用したる児童研究』の一節を訳したものであり、このことから、“児童研究”が『教育に應用したる児童研究』の略称であることが推察される。周作人が雑誌『児童研究』を定期購読していたらしいことを

考え合わせれば、彼のいう『児童研究』とは、あるいは『教育に応用したる児童研究』と雑誌『児童研究』所載記事の総称だったのかもしれない。

ここで、高島の、雑誌『児童研究』との関わりについて見ておきたい。

近代児童学は、ルソーの『エミール』に端を発し、幼児期教育の祖であるドイツの教育学者フレーベルの自力活動説提唱を経て、20世紀初頭のアメリカにおけるダーウィニズムやフロイトの精神心理分析法の影響を受けた心理学者スタンレー・ホールらによる児童研究運動へとつながっていった。以降、児童研究は世界的な広がりを見せ、やがて日本にも波及することとなる。

スタンレー・ホール（1844-1924）は、1909年クラーク大学創立20周年にジークムント・フロイトら精神分析運動の主導者を招き、その内容をアメリカに認知させた人物である。ホールの児童研究は、知識として「知ること」と、実践として「行うこと」の優生学教育を強調し、子どもをめぐる多方面にわたる専門分野——医学、衛生学、犯罪学、法学、宗教学、教育学などを包括する総合的かつ高次元の研究を発展させる必要性を提唱した。

このホールの理論は、日本児童学研究にも様々な影響を与えたが、その一端は雑誌『児童研究』にも見られる。『児童研究』は、毎号巻頭に当時の児童研究の権威とされる学者の肖像画と童謡とを掲載するが、創刊号所載の肖像画はヘルバルト（1776-1841）、2号の肖像画はスタンレー・ホールであった。また、当時の児童研究会会長であった元良勇次郎がホール指導の下心理学博士号を取得した経歴の持ち主であったこともあり、ホールを中心とするアメリカ児童研究界との交流が盛んに行われ、『児童研究』にもその活動状況を紹介する記事がしばしば掲載された。

一方、高島は、明治23（1890）年、元良勇次郎・英語学者神田乃武・社会学者外山正一によって創設された「日本教育研究会」に参加し、欧米における児童研究活動について知ることとなった。その後、学習院上野分校への転勤を機に、東大教授であった元良の私邸で開かれていた心理学談話会に参加するようになった（～1896年）。1901年には、児童心理学者塚原政次・心理学者松本孝次郎も加わった東大心理学会にも参加するようになる。

明治31（1898）年、元良らはそれまで「児童研究会」としていた会の名称を「日本児童学会」と改め、心理学・教育学・医学の三分野から総合的な児童研究を行う「児童学」を標榜する学会が誕生した。彼らは同時に月刊誌『児童研究』を創刊、高島はその幹事となり、毎号投稿した他、それらの投稿記事をまとめた単行本をほぼ毎年出版するようになった（『高島平三郎著作集』参照）。静岡での講演を記録した『児童心理講話』（1909）の他、1910年に『児童を謳へる文学』、1911年に『教育に応用したる児童研究』を次々に上梓し、いずれもベストセラーとなった（13）。

さて、この頃周作人はちょうど日本に留学中で、新婚生活をスタートさせていた。先述の通り実践的な日本語学習に意欲的だった彼が、家庭を築く中で児童学に興味を持ち、高島の講演を聴きに行ったり、講演録『児童心理講話』を読んで胎教や幼児教育に関する新しい知識に刺激を受けたりしたとしても、何ら不思議はない。

周作人が帰国後最初に手がけたのは、各国の童話の翻訳、古書整理、そして児童学研究論文の執筆であった。彼は、1912年故郷で中学校の英語教師となり、翌年には紹興県教育会の会長に推薦され、『紹興県教育会月刊』を刊行する。その誌上において、童話・玩具・遊戯・喧嘩など児童に関する翻訳や論文を数多く発表していくのである。

1913年に発表した「児童研究導言」(14)の中で、周作人は、ルソー・フレーベル・ティーデマン・ホールという西洋近代児童研究の流れについてまとめているが、これは、高島の『教育に応用したる児童研究』冒頭の「緒言」を参照したものと考えられる。また、児童期を嬰兒期・幼児期・少年期・青年期の4つに分類したり、個体発生は系統発生を繰り返すという「反復説」(15)を取り上げたりしているのも、高島の『児童心理講話』の、「胚子期—胎児期—幼児期—少年（少女）期—青年期」という五つの過程にある者を総称して「児童」とし、生命を受けてから成長発達のピークに至るまでのすべての変化を研究対象とすることを踏まえている。

当時の周作人がいかに高島の研究を初めとする日本の児童学を研究し、それに精通していたかは、1913年から1914年にかけて児童論に関する書籍を日本から大量に取り寄せていたことから容易にうかがい知ることができる。周作人は、ホールなどの進化論的实践教育学をいち早く中国に紹介することとなったが、その「児童問題之初解」「家庭教育論」「遺伝與教育」「民種改良之教育」などの文論の多くは、当時の雑誌『児童研究』に取り上げられた問題を論点としていた。しかも彼は、日本児童学研究の動向を理解するために、英語原典書籍も取り寄せて読んでいたという。

ここで、帰国後の周作人の児童学関連著作について、まとめてみたい。

帰国後、周作人が最初に書いたのは「童話研究」である。この文章は、1912年6月5日付の地元紙『民興日報』に掲載された後、再度書き直し、更に北京の魯迅に送って推敲を依頼した経緯がある。日記によれば、その後、同時期に翻訳した作品などと一緒に中華書局に持ち込んだものの採用されなかったという。翌1913年になって、魯迅が勤めていた教育部の内部刊行物『教育部編纂処月刊』1-7に掲載された。同誌1-8には「童話略論」も掲載されている。

1913年に紹興県教育会長に就任すると、『紹興県教育会月刊』を創刊し、「童話研究」「童

話略論」を含め数編の児童研究論文を掲載した。これらの論文は、1932年に『児童文学小論』として編集・出版された。

ところで、周作人の児童文学論についての研究は、童話に注目したものが多く、主として、周作人の童話起源解釈とラングの人類学や柳田国男の民俗学との関連が論じられてきた。しかし筆者は、高島の連載論文「童話ニ就テ」(16)や同時期の日本における教育応用童話にこそ注目すべきだと考える。

「童話研究」(17)は、その冒頭で、神話・世説・童話の起源がもともとは同じであるとし、その関連性と各種の神話類のパターンについて説明する。その後で、紹興につたわる民話「蛇郎」や「老虎外婆(虎ばあさん)」を例に挙げ、ラングの人類学解釈法や比較神話学の手法を用いて起源の解明を試みている。更に、高木敏雄の『比較神話学』(18)や高島の児童研究教育応用論などを参考にして童話の題材、応用効能、特徴など議論を展開していくのである。

一方、「童話研究」の一年後に書かれた「童話略論」(19)では、童話論を「起源」「分類」「解釈」「変遷」「応用」「評価」「人為童話」「結論」の各論点に整理した上で、要領よく議論を展開している。

この二編の童話論を書くにあたり、周作人は様々な資料を参考に行っていることが確認できるが、その中でも大きな影響を受けたと考えられるのが、高島の「童話ニ就テ」である。1909年に発表された「童話ニ就テ」は、「起源」「種類」「童話及び教育」「日本の童話」「結論」という順に、雑誌『児童研究』に三回に分けて掲載された。周作人の「童話研究」と「童話略論」は、この高島論文を二分割して書かれたように見受けられる。

高橋論文(「童話ニ就テ」)と周作人両論文の構成対応表

「童話ニ就テ」	「童話研究」	「童話略論」
①起源	①神話世説童話	①起源
②種類		②分類
		③解釈
		④変遷
⑤応用		
③童話及び教育		⑥評価

④日本の童話	②蛇郎	
	③老虎外婆	
	④童話のまとめ	
		⑦人為童話
⑤結論		⑧結論

ただし、「童話略論」にある「解釈」「変遷」の両項目において、周作人は高島の論文にはないラングの人類学解釈法を紹介し、また高木敏雄の『比較神話学』、蘆田重常の『教育的応用を主としたる童話の研究』(20)を参考にしている。また、「童話研究」の「蛇郎」「老虎外婆」の紹興民話を紹介する部分は、高島論文の「日本の童話」の項目を紹興の民話に置き換えて、人類学的比較神話学の解釈法での解明を試みているのである。なお、後年の連作「古童話釈義」「童話釈義」(21)もまた、その後に集まった紹興の民話伝説資料を取り上げ、補足説明しようとしたものである。

このように、周作人の二編は、構成には自身の工夫を加えつつも、概ね高島論文やその周辺の資料をベースとして書かれている。もちろん、いずれも西洋の児童研究を基盤としている以上、一致する部分が多いのは当然とも言えるが、それでも、各論旨展開を見る限り、高島論文が周作人論文に大きな影響を与えたことは明らかであろう。

さて、「童話略論」の第5章「応用」は、児童教育や教育応用童話について述べたものである。次に、注目すべき点をいくつか挙げてみたい。

(一) 童話というものは、原始人の文学、またすなわち児童の文学であって、個体発生は系統発生と同じ順序の発達とするため、両者の情緒的趣味はほぼ通じ合うものである。従って、いま児童に童話を語って聞かせる場合、児童の物語を聞きたがる欲求を満足させると同時に、自然に順応し、成長を助け、各期における児童の本来の姿を保持し、段階を追って進めることが、育成上の最重点である。

(二) 童話の利用は、幼児期が最も適しており、3歳から10歳までの期間である。この時期の子供は最も空想力に富んでいるため、童話の内容を正しく適合させることで、想像力を養わせる。より多くの童話に親しませることで、感受性もより豊かになり、後日の学問の基礎を築くことができる。

(三) 童話は、社会生活について、その大略を有し、且つ単純化して語るものである。従って、児童がこれを聞けば、人事の大略を知ることができ、将来社会に出て行く上での力となる。また、童話が語る事物・鳥獣・草木は、日常目にするものばかりで、ものの名前を多く覚え、誦読学習するのに有益である。

(一) 童话者，原人之文学，亦即儿童之文学，以个体发生与系统发生同序，故二者感情趣味约略相同。今以童话语儿童，既足以履其喜闻故事之要求，且得顺应自然，助长发达，使各期之儿童得保其自然之本相，按程而进，正蒙养之最要义也。

(二) 童话适用，以幼儿期为最，计自三岁至十岁止。其时小儿最富空想，童话内容正与相合，用以长养其想象，使即于繁富，感受之力亦渐敏疾，为后日问学之基。

(三) 童话叙社会生活，大致略具，而悉化为单纯，儿童闻之，能了知人事大概，为将来入世之资。又所言事物及鸟兽草木，皆所习见，多识名物，亦有裨诵习也。(22)

そして更に、第6章「評価」において、教育のための童話として適当であるかの基準として、「優美」「新奇」「単純」「均等」という項目を挙げている。

そもそも、周作人らの幼少期は、教育と言え、すべて科挙試験のための勉強であった。周作人の童話や玩具への傾倒は、あるいはこうした自身が受けた教育への反発によるものであったかもしれない。周作人は、子どもにとっての楽しいおはなしや、遊びの道具、子どもの興味を刺激する児童書などに熱心に関心を寄せ続けていく。そういった中、日本の児童研究において盛んに論じられていた童話の教育的応用は、周作人にとって十分注目すべき活動と思えたはずである。

『周作人自述』(23)に次のような記述がある。

もしもフロイト派の児童心理学を理解していなければ、彼（周）の思想態度を批判しようとしても無理である。(如不懂弗洛伊特派的儿童心理学，批评他的思想态度，无论怎么说，全无处，全是徒劳。)

ここにいう「フロイト派の児童心理学」とは、ホールらフロイト派精神分析法を取り入れた一派のことである。そのホールの学説を、周作人は高島ら日本の学者の研究成果を借りて取り入れていったのである。

また、こうも記載されている。

私は、科学・哲学・美術・人類学・児童心理学・精神分析諸学を専門とし理解した上で児童を愛する十人ほどの人物がいて、一緒に児童のための定期刊行物を発行して

くれることを願っている。(我希望有十个弄科学, 哲学, 文学, 美术, 人类学, 儿童心理学, 精神分析诸学, 理解而又爱儿童的人, 合办一种为儿童的定期刊。)(24)

これはまさしくホールの学説及び高島らの『児童研究』が目指した総合的児童研究を意識したものである。実際、1920年に行われた講演『児童の文学』において、周作人は、日本の文人画家学者がみな児童のために創作、編述していることを紹介し、1918年に鈴木三重吉主宰で発行された『赤い鳥』のような文芸雑誌が中国でも刊行されることを願っていると発言している。

ちなみに、周作人は鄭振鐸編集の『児童世界』についてはほとんど取り上げていない。その理由はやはり、日本には『児童研究』のような総合的な研究雑誌や『赤い鳥』のような創作童話を発表する創作雑誌があるのに対して、鄭振鐸の『児童世界』は童話の翻訳や翻案作品を掲載するに過ぎないレベルだったからである。

従来の周作人の外国文学受容に関する研究は、アンドルー・ラング、フレーザー、エリス、柳田国男といった学者達の研究と、周作人の神話学民俗学受容という観点から論じられることが多く、フロイト学派——ホール——高島というルートの児童学という観点で論じられることは極めて少なかったように思われる。しかし、これまで述べたとおり、周作人の初期の文筆活動には「童話研究」「児童研究」という色彩が濃く、彼の帰国前後に日本で発行されていた各種雑誌・書籍への関心は看過できないものであると言わねばならない。すなわち、「児童学」という観点から周作人の文筆活動について再検討し、それが後の様々な文学活動にどう展開していったのか分析することもまた、周作人文学を考える上で必要不可欠な作業であると考えべきである。

魯迅は、その著作の中で高島平三郎についてほとんど触れていないし、高島と面識があったかも不明である。しかし、高島は1904年に弘文学院の教授、1907年には独逸協会の教授に就任しており、あるいは留学中の魯迅とは近い存在だったかもしれない。魯迅は1914年に高島の「児童觀念界の研究」を訳し、翌年刊行された教育部主催の『全国児童芸術展覽会紀要』に組み入れている。この長篇論文は、1898年の『児童研究』創刊号に掲載されたもので、その後『児童学綱要』に編入されている。魯迅はおそらく周作人が1913年に購入した『児童学綱要』(演説集)を使って訳したのであろう。この頃周作人は紹興におり、魯迅と頻繁に連絡をとっていた。周作人は地元で学校成績展覽会(1914)を、魯迅は教育部主催の全国児童芸術展覽会(同年)をそれぞれ主催しており、それに関連して児童研究に関する言説も多くなっている。

三、

高島は話術にすぐれ、彼の講演はわかりやすいと評判だったという。講演内容も多岐にわたり、庶民にとってもなじみ深い遊び、童話、人形やその他の玩具、胎児教育、家庭教育など様々であった。彼の『児童心理講話』は当時の皇太子・同妃殿下に献上した記録が残っている。

次に、周作人と高島の関係について、玩具に関する言動を通して見ていきたい。

周作人に玩具を語る文章が多数あることはよく知られている。彼が日本留学中の1906年に、東京上野で初めての子ども博覧会が開催された。周作人は、魯迅とともにこの博覧会を訪れたことがわかっている。その後、1909年4月から1914年にかけて、三越デパートが毎年児童博覧会を開催し、その際、巖谷小波を顧問に、新渡戸稲造・高島平三郎を審査員に迎え、児童用品研究会を発足させた。この三越の児童博覧会は当時大きな反響を呼んだとされるので、至近距離に住んでいた周作人夫婦が足を運んでいた可能性は高い。

1912年5月16日、周家に長男豊一が誕生した。『周作人日記』を読むと、長男誕生の半年後あたりから、玩具購入の記録が目立つようになる。更に、1914年1月発行の『紹興県教育会月刊』5号には、「玩具研究一」「玩具研究二」が掲載されている。

実はこの「玩具研究一」(25)は、初めの一段落を除き、ほぼ高島の『教育に応用したる児童研究』の一節「玩具と教育」を訳したものである。しかも、その内容は、1909年に高島が三越デパートの児童博覧会において講演した「玩具の注意事項」に等しい。想像をたくましくすれば、周作人は博覧会での高島の講演を聴いて、『教育に応用したる児童研究』を購入する気になったとも考えられる。

一方「玩具研究二」(26)は、長濱宗信の『小児養育之心得』を節訳したものである。長濱宗信は、雑誌『児童研究』の投稿経験もある小児科医者で、彼の著作は子育ての実用書として広く知られ、雑誌にも頻繁に広告が載るほどであった。周作人の長男豊一は幼い頃から病弱で、『周作人日記』にも豊一の様子がしばしば記録されている。病弱な長男を心配した周作人夫婦は、おそらく子育ての参考書として長濱の『小児養育之心得』を手にしたのであろう。

周作人は、その後も、新井道太郎の『子供のいたづらと喧嘩の研究』や、ホールの研究を紹介する「憤怒の動作の説明」、また、体罰・なぞなぞ・遊戯などについて、様々な文章を発表している。玩具についても、「玩具」(1923)、「江都二色」(1937)、「玩具」(1939)、「俗曲和玩具」(1944)などを次々に著した。

1934年の夏、周作人一家は日本に帰省した。到着直後の8月1日、玩具関連出版社である建設社社長坂上氏と佐々木両氏に案内され、当時建設中の南品川にある有坂與太郎所有の玩具蔵「蘇民塔」を見せてもらっている。その時の懇談については、1934年出版の『郷

土玩具』第二巻に掲載された (27)。

1937 年、周作人は北尾重政画・山田清作編『江都二色』を紹介する文章を書いた。周作人はこの日本玩具図鑑を紹介しつつ、自身が所有する玩具関連書籍を十数種も挙げて詳しく述べている。後に日本の国語研究家である国府慎太郎にこけし二体を贈られた際に、周作人は贈答詩で感謝の意を表しているが、これが周作人ならではの洒落た返答となっている。

芥子人形亦妙哉、出身应是埴轮来。小孙望见嘻嘻笑、何处娃娃似棒槌。(28)

(こけし人形とは またよきかな

埴輪をもとに生まれたにちがいあるまい

幼い孫は ながめながらケラケラ笑う

この人形 なんだか洗濯棒にも似ているような)

日本玩具についてこれほど語ることのできる中国人作家は他にいなかったであろう。

実は、子供の玩具に対する熱中ぶり(遊戯三昧)について、それこそは芸術の求める理想の境地であると述べる一文が存在する(29)。すなわち、周作人の文学芸術観にせまる見地であり、周作人の玩具好きは、ただの趣味では片付けられない、周作人文学の全体像を探る上で極めて重要な一要素であることを示しており、容易に看過できない問題である。この問題については、別稿「周作人と玩具」(30)にて詳しく述べることにする。

四、

紹興時期に発表された児童研究の諸論は、中国にはまだ早すぎたのだろうか、当時ほとんど反響がなかった。また同時期に周作人が情熱をそそいでいた「童謡・童話募集」(31)にも、同じく反応を得られなかった。児童研究が中国に盛んに語られるのは五四新文学運動勃発以降になる。日本では、1918 年鈴木三重吉主宰の児童雑誌『赤い鳥』が創刊され、多くの著名作家(島崎藤村、芥川龍之介など)が子供の為に創作童話を書くようになる。また中国では、胡適らはプラグマティズムを代表する 20 世紀のアメリカの教育学者ジョン・デューイ(1859-1952)を中国に招聘し、彼は 1919 年から 1921 年まで 2 年間中国滞在し、各地に講演をしてまわった。これらの動きの中で中国は児童学全般に研究を広げた。

一方、1917 年、周作人は蔡元培によって北京大学教授に招聘され、『新青年』や『晨报副刊』、『語絲』などを主戦場として、「人間の文学」や「思想革命」など様々な新文学に必要な文芸理論を発表するようになる。婦人と児童の問題は彼の「人間の文学」の二大主題である。

1920 年、周作人は孔徳学院にて「児童の文学」(32) と題する講演を行い、その内容は紹興時期に発表された一連の児童学研究論説を書き直されたものだった。その講演録は後に『新青年』8-4 に掲載した。以下はその一節である。

私は熱心な人が小さな団体を作って研究に着手し、各地の民謡や民話を収集し、古典籍中の資料を修訂し、外国の著作物を翻訳して、何冊かの本にまとめ、家庭や学校での需要に供してくれることを願っている。(我希望有热心的人, 结合一个小团体, 起手研究, 逐渐收集各地歌谣故事, 修订古书里的材料, 翻译外国的著作, 编成几部书, 供家庭学校的用…)

このような文化遺産の収集活動は、明治大正期の日本では、『朝日新聞』『郷土研究』『児童研究』『此花』において盛んに行われていた。周作人もこれに刺激され、帰国後まもない1914年に『紹興県教育会月刊』に童謡・童話収集の広告を出している。周作人自身もその後、1918年歌謡収集、1920年猥褻歌謡収集など精力的に収集活動が続けていた。集まった童謡歌謡の資料は、『紹興児歌述略』、後の『紹興児歌集』にまとめられたのである。

一方、日本の児童文学作品について、周作人は実に幅広く紹介している。まず、留学中にワイルドとアンデルセンの童話を二篇翻訳した『域外小説集』(1909)を出版した。周作人は中国で初めてのアンデルセン童話の紹介者である。森鷗外などのアンデルセン翻訳紹介がなければ、もしかしたら周作人は留学中アンデルセンという作家を知ることはなかったかもしれない。帰国後も子どもの生活を描いた国木田独歩の小説「巡査」、志賀直哉の「清兵衛と瓢箪」、鈴木三重吉の「金魚」などを翻訳して、兄弟二人で『日本現代小説集』(1923)を作った。1923年にはまた児童劇を含めた童話を収めた『土之盤筵』、1925年には日本の児童詩176篇とギリシアの児童詩34篇を収めた『陀螺』、また『土之盤筵』収録の作品を翻訳中に、魯迅との不和により中断した“児童劇”をその後次々に翻訳し、1932年に『児童劇』として結集している。この他にも、動植物に関するもの、性教育に関するものなど児童教育に必要な幅広い分野に目を配り、精力的に紹介を続けていった。

もちろん、日本や西洋のような外国の書籍の翻訳に留まらず、中国の様々な古典籍から題材を発掘して児童文学作品として供することも、生涯にわたり続けている。

ここで注目されるのは、周作人が児童劇を数多く翻訳したことである。周作人は、児童に対し、児童心理を十分認識した上で作られる良質の児童劇を提供する義務がある(33)と述べている。京劇のような教訓臭い伝統演劇をあれほど毛嫌いしていたことを考え合わせれば、このことの重要性は明らかであろう。周作人の児童文学を理解するためには、童話、童謡(児歌)、児童劇という三つの分野に注目し、考察する必要がある。

五、

周作人は戦後、日本に協力した「漢奸」として逮捕され、収監された。彼は老虎橋監獄中であって多くの詩を書いているが、その中には、1947年に書かれた『児童雑事詩』も含まれる。釈放後の1950年、獄中で書いた児童雑事詩を『亦報』に連載し、のちに単行本にまとめる際、その序文に次のように述べている。

私のこれらの詩は、実際のところ児童に関する論文の変相にすぎない。ただ、今は文章を書きたくないで、七言四句の形式を用いたのである。形式などどうでもよいのだし、私の意図がどの程度伝わるかもどうでもよい。（我这一卷所谓诗，实在乃只是一篇关于儿童的论文的变相，不过，现在觉得不想写文章，所以用了七言四句的形式。反正这形式并无什么关系，就是我的意思能否多分传达也没有关系。）（34）

つまり、この詩集は彼の児童論であり、形式よりもその内容が重要であると強調している。

周作人はまた、「私の興味は一に言語、二に名物、三に風物」にあるとするが、これらの児童雑事詩も、この三要素を特に意識したものとなっている。すなわち、彼がそれまでこつこつと収集してきた、古典籍や民話の中から見つけ出した児童の生活、児童に関する物語を、七言四句の詩形にして再創作したのである。

周作人は、「童話研究」の後半部分すなわち高島論文を下敷きにした部分において、次のように述べている。

童話で語られるのは実生活であり、その多くは見慣れたものであるから、これを用いて児童に教えれば、多くの名言を覚えさせることができ、誦読・学習に有益である。また、鳥獣草木に関する内容も多く、自然と親しみ、自然の大きく美しいことを知ることができる。いずれも童話の効用の顕著な例である。

（童話所言实物，多系习见，用以教示儿童，使多识名言，则有益于诵习，且以多述鸟兽草木之事，因与天物相亲，而知自然之大且美，斯皆效用之显见者也。）（35）

この記述を踏まえて、再び周作人の児童雑事詩を読む時、これらの詩が周作人の童話ひいては児童文学に対する見方を巧みに取り入れて作られていることに気付く。児童雑事詩は、確かに彼の創作児童詩なのである。周作人文学に創作童話はないが、伊藤敬一は周作人の「西山小品」の数作は童話風小説だと評価している。やはり実作にも探究した形跡が

あったといえよう。今回は児童雑事詩を見てみる。

『児童雑事詩』は三編で構成される。甲編は児童生活詩 24 篇、乙編は児童故事詩 24 篇、丙編は児童生活詩補 24 篇、合計 72 首が収録される。周作人お気に入りの詩集で、先に触れた豊子愷の挿絵 69 枚も花を添えている。以下に、各編から一首ずつ紹介しておく。

新年拜岁换新衣，白袜花鞋样样齐。小辫朝天红线扎，分明一只小荸荠。甲
年始回りで新しい服に着替える
真っ白なくつした 刺繍の靴
赤いリボンで結んだ髪は上に向き
芽の出たクワイにほんとそっくり

当年李耳老而孩，奇事差堪比老莱。想见手持摇咕咚，白头卧地哭咳咳。乙
昔 老子は老いてもこどものようだったというが
あきれるような行動は 老莱子にはかなわない
手にはガラガラを握りしめ
白髪頭で地面にころがり オンオン泣いて見せたとか

老鼠今朝也做亲，灯笼火把闹盈门。新娘照例红衣袴，翘起胡须十许根。丙
ネズミも今朝は結婚式
提灯 たいまつ 大にぎわい
花嫁は 例の真っ赤なドレス
ヒゲがつんつん飛び出てる

結び、

さて、周作人の児童に関する文章の執筆状態から、彼の児童論の変遷は四期に分けて述べることができる。本論考の結論として、以下にその四期についてまとめておく。

①1912～1914 年（帰国後、長男誕生と教育関係職への就任）

周作人は日本留学期に高島編集の雑誌『児童研究』、及び彼の著作に出会い、日本でも始まったばかりの児童学や児童文学に興味を持った。そして帰国後、長男誕生と紹興での教育関係職への就任を契機に、明治大正期の児童研究を媒介として知ったホールらの進化論的実践教育学を、ラングの人類学や柳田らの民俗学、そして比較神話学などに関連付けて精力的に中国に紹介した。

帰国直後に書いた一連の児童研究に関する論説：児童期の分類、個体発生と系統発生の“反復説”、各領域による総合的研究を行う児童学といった周作人の児童論は、日本の児童学の発展に啓発されたもので、内容からも日本児童研究の西洋諸理論輸入の流れとほぼ同じであることが分かる。しかしそれらの学説の紹介は、中国が受容するには時期尚早で、当時あまり反響はなかった。

②1917～1925 年（入京後、北京大学教授在職時）

周作人の児童学研究が再び注目されたのは、周作人が北京大学教授に就任した後である。日本では 1918 年に鈴木三重吉が『赤い鳥』を創刊し、多くの文壇作家が児童のために創作童話を書き始めていた。その影響もあり、またデューイの中国訪問と 2 年の滞在もあって、中国の児童学研究ブームに火がつき、ようやく児童文学創作の機運が到来した。周作人は早期ワイルドやアンデルセンの童話翻訳を先駆けて行い、その後も、精力的に民間や古典の児童文学材料を収集した他、日本や西洋の児童詩、児童読本、児童劇、玩具、遊戯などあらゆる実践教育に役立つものを紹介・評論して、中国の伝統的な儒教教育（その後の政治的教訓的な内容も含めて）を痛烈に批判し、想像力の養成や美育（趣味）教育を提唱した。これらは日本の“教育に応用する童話重視”の影響を受けており、童話の教育効能に注目したものであった（つまり、子供の成長にあわせて、3－10 歳の幼児期には想像力養成のための童話が必要であり、社会生活や世間人情を理解し、社会人になる準備をし、鳥獣草木など生物学植物学に対する知識の理解を深めるためにも童話が重要であるとする説）。

童話の創作については「西山小品」は伊藤敬一が童話風小説と評価している。新詩創作に子供に関する詩が多かったことも周作人の童心からくるものだろう。

③1934～1945 年（34 年日本訪問、日本再認識の旅）

1934 年周作人は再び来日し、明治大正期に活躍した文壇の旧友らとも再会した。帰国後は、児童関連の文章をまた多く書くようになるが、中でも特に玩具関連の文章が目立つ。有坂與太郎のような日本の郷土玩具の収集に感銘を受けた結果と考えられ、日本の玩具研究書籍や研究状況を中国に紹介している。周作人の玩具への愛着は彼の芸術観にも通じるものである。

④1947～1950 年（漢奸罪で収監、出獄後に執筆再開）

戦後、長年温めてきた児童論を『児童雑事詩』の形で示し、創作児童詩を作った。その他、精力的に集め続けていた童謡の中から『紹興兒歌集』を編集し出版した。晩年には、『イソップ寓言集』と『枕草子』の全訳を出している。

周作人の児童学、児童文学研究と創作は以上のような推移で進められていた。周作人の初期児童論形成には、高島平三郎を中心とした日本児童学童話学の研究が多く取り入れられて、彼の文学生涯に影響を与えていたことを指摘しておきたい。

注：

※ 本論考は平成 29 年度の国内研修時に申請した『中国近現代の児童文学作品と日本』の研究課題の一部分である。

(1) 中国児童文学史の先行論文や著書に蔣風、方衛平、王泉根、劉緒源、新村徹の著書があり、周作人と童話・児童文学の研究には伊藤敬一、劉軍、李瑾、鄭恵の論文がある。また周作人と A・ラング、柳田国男等の研究には子安加余子、趙京華の論文がある。

(2) 周作人「童話略論」『紹興県教育会月刊』第 2 号 (1913 年 11 月 15 日)

治教育童話，一当证诸民俗学，否则不成为童話，二当证诸儿童学，否则不合于教育，且欲治教育童話不可不自纯粹童話入手，此所以于起源及解释不可不三致意，以求其初步不误者也。

(3) 周作人「歌詠兒童の文学」『晨報副刊・緑洲欄』(1923 年 2 月 11 日)

高島平三郎編、竹久夢二画『兒童を謳へる文学』(洛陽堂 1910 年)

(4) 楊曉文『豐子愷研究』(東方書店 1998 年 4 月)

鍾叔河『周作人豐子愷兒童雜事詩圖箋注』(中華書店 1991 年)

(5) 周作人「我的春天」『晨報副刊・緑洲欄』(1923 年 2 月 14 日)

(6) 周作人と一茶についての研究は拙書『周作人と江戸庶民文化』(創土社 2005 年)と潘秀蓉『周作人と日本古典文学』(厦門大学出版 2014 年)に詳細に論じられている。

(7) 周作人「歌詠兒童の文学」(注 3 を参照)

(8) 周作人「如夢記」『庸報』(1940 年 11 月 5 日)『葉堂語録』所収

(9) 周作人「『銀茶匙』引言」『芸文雜誌』3 卷 1-2 合刊 (1945 年 1 月 15 日)

(10) 周作人「児童文学・我的雜学 10」『華北新報』(1944 年 7 月 9 日)

(11) 『周作人日記』(大象出版社 1991 年) 1913 年 4 月 12 日の日記

(12) 高島平三郎『教育に應用したる兒童研究』(洛陽堂 1911 年)

(13) 『高島平三郎著作集』(學術出版社 2009 年)

高島平三郎『兒童心理講話』(廣文堂書店 1909 年)

高島平三郎『教育に應用したる兒童研究』(洛陽堂 1911 年)

(14) 周作人「兒童研究導言」『紹興県教育会月刊』第 3 号 (1913 年 12 月 15 日)

- (15) 個体発生は系統発生を繰り返すという生物学の仮説を「反復説」という。ここでは、人間の児童期 25 年間は人類の進化過程を再現するものだとする、生物学的理論を児童発達学に応用した考え方をいう。
- (16) 高島の連載論文「童話ニ就テ」『児童研究』復刻版（東京第一書房 1979－1987）
連載一回目 1909 年 7 月 25 日（13 巻 1 号）、二回目 8 月 25 日（13 巻 2 号）、三回目 9 月 25 日（13 巻 3 号）
- (17) 周作人「童話研究」『教育部編纂処月刊』1 巻 7 号（1913 年 8 月刊）
- (18) 高木敏雄『比較神話学』（東京博文館 1904 年）
- (19) 周作人「童話略論」『紹興県教育会月刊』第 2 号（1913 年 11 月 15 日）
- (20) 蘆田重常『教育的応用を主としたる童話の研究』（東京勸業書院 1913 年）
周作人は 1913 年 7 月 1 日の日記に「阅童话ノ研究有谬误处以不依人类学也」とある。
- (21) 周作人「古童話釈義」『紹興県教育会月刊』第 7 号（1914 年 4 月 20 日）
周作人「童話釈義」『紹興県教育会月刊』第 9 号（1914 年 6 月 20 日）
- (22) 周作人「童話略論」『紹興県教育会月刊』第 2 号（1913 年 11 月 15 日）
- (23) 「周作人自述」陶明志編『周作人論』（北新書局 1934 年 12 月）
- (24) 周作人「關於兒童的書」『晨報副刊』（1923 年 8 月 27 日）
- (25) 周作人「玩具研究一」『紹興県教育会月刊』第 5 号（1914 年 2 月 20 日）
- (26) 周作人「玩具研究二」『紹興県教育会月刊』第 5 号（1914 年 2 月 20 日）
- (27) 『周作人日記』（1934 年 8 月 1 日の日記）
「周作人と有坂與太郎の対談」『郷土玩具』第二巻（建設社 1934 年）
- (28) 周作人「俗曲与玩具・我的雑学 17」『華北新報・文学』（1944 年 5 月 1 日から 8 月 26 日までの連載）
- (29) 周作人「『陀螺』序」『語絲』32 期（1925 年 6 月 22 日）
- (30) 「周作人と玩具」『周作人通信』第 7 号に掲載される予定。
- (31) 周作人「征求紹興兒歌童話啓」『紹興県教育会月刊』第 4 号（1914 年 1 月 20 日）
- (32) 周作人「兒童的文学」『新青年』8 巻 4 号（1920 年 12 月 1 日）『芸術與生活』所収
- (33) 周作人「兒童劇」『晨報副刊』（1923 年 3 月 8 日）『自己的園地』所収
- (34) 周作人『兒童雜事詩』序文
鍾叔河『周作人豐子愷兒童雜事詩圖箋注』（中華書店 1991 年）
- (35) 周作人「童話研究」『教育部編纂処月刊』1 巻 7 号（1913 年 8 月刊）